

# EICUにおけるリーダー看護師育成に向けた 事前チェックリストの開発計画

A Plan for Developing a Pre-checklist for Leader Nurses in an Emergency Intensive Care Unit

増永恵子\*、久保田真一郎\*2、江川良裕\*2、鈴木克明\*2

Keiko MASUNAGA、Shin-Ichiro KUBOTA、Yoshihiro EKAWA、Katsuaki SUZUKI

熊本大学大学院社会文化学部教授システム学専攻\* 熊本大学教授システム学研究センター\*2

Graduate School of Instructional Systems、Kumamoto University

Research Center for Instructional Systems、Kumamoto University

〈あらまし〉 A 病院の救命集中治療室（以下、EICU とする）では、チームナーシングを取り入れており、臨床経験年数 2、3 年をめどに勤務帯リーダートレーニング（以下、LT とする）が開始される。LT をうける予定のスタッフ、LT トレーナーを対象に LT に関するアンケート調査を行った。アンケートから LT に必要な準備に関する情報や LT の到達目標の表現は学習目標が曖昧であり、何をすると目標に到達できるか判断できない状態であった。そこで、LT 評価表の表現をもとに、LT の学習目標を明確化する作業を行ない、LT を実施する前に満たしておくべき事項をまとめたチェックリストを開発する計画を立てた。これにより、LT 対象者が LT に対して、前向きに取り組み自信と期待をもって LT に臨むことができ、トレーナーにとっての LT のやりやすさや苛立ちのなさといった精神的負担が軽減される効果を狙う。

〈キーワード〉 看護教育、リーダートレーニング、マネジメント、認知的徒弟制度、教材開発

## 1. はじめに

A 病院の救命集中治療室（以下、EICU とする）では、チームナーシングを取り入れており、臨床経験年数 2、3 年をめどに勤務帯リーダートレーニング（以下、LT とする）が開始される。勤務帯リーダーとは、各勤務帯で、リーダーの役割を担う看護師であり、その勤務帯に提供する看護の責任を担っている。医師の指示等の情報を収集し、入室している患者の全体像を把握し、起こりえる状況を予測すると共に様々な状況下でチームメンバーの実践能力や業務内容、業務量などを総合的に判断しマネジメントを行なう。

A 病院の EICU の LT は夜勤帯から OJT 形式で開始し、3 勤務帯実施される。その後、夜勤リーダーの独り立ちとなり、管理者の判断で日勤 LT も同様に OJT 形式で 3 勤務帯実施し、その後、独り立ちとなる。LT 中は、LT トレーナーが所定の評価表に沿って評価を行うと共に勤務終了後に同じ勤務帯のスタッフと反省会を実施する。

これまでに、筆者は、「LT はやりたくない」といったリーダー看護師候補生の後ろ向きな声を多く聞いてきた。そこで、LT に対して前向きな気持ちで LT に取り組むことができるように動機付けを行ない LT の期待と価値を高める必要があると考えている。

内田ほか（2010）は、実践的知恵を養い、「知識を使いこなす」能力として、知識を使うタイミングを見いだすための「状況認識力」と、知識を

自身の文脈に置き換え利用するための「実践力」が重要であると述べている。勤務帯リーダーは数々の問題解決を判断する場面に遭遇する為、マネジメント的な技能が必要である。よって、先行研究にあるように、実践的知恵を修得するためには、状況認識力と実践力を養う必要がある。そのためには、認知的徒弟制度を活用し言語化できる学習環境が必要であると考えられる。

そこで、本発表では、現状調査のために行ったアンケート調査の結果を報告する。また、LT に必要な準備や情報を提示し、LT 対象者が自信と期待をもって LT に臨むことができるようにするための LT 事前チェックリストの開発計画を述べる。LT トレーナーの LT のやりやすさや苛立ちのなさといった精神的負担を軽減する効果を狙う。

## 2. 動機づけのアンケート調査

A 病院の LT をうける予定のスタッフ 16 名（はじめて LT をうける予定のスタッフ、夜勤の LT は終了しているが日勤 LT は未実施のスタッフ、過去 1 年以内に LT を終了したスタッフ）と LT トレーナー 14 名に対し、LT に関するアンケート調査を行った。LT をうける予定のスタッフは、LT に関して肯定的な結果で、LT が自己の成長を促す過程であり、LT を通して学ばなければならないといけないと思っているもの、自由記載欄には、「不安」というキーワードがあがった。一方、LT トレーナーからは、LT は負担であるという意見

が聞かれ、その理由としては、LT を受けるスタッフのレベルが不明であることであった。LT を受ける予定のスタッフ、LT トレーナー共通して自由記載欄に、「LT の確認事項や基準といったチェックリスト形式のものや何か可視化できるようなものの必要性を感じた」という記載があった。その理由として、LT に必要な準備など情報の提示がないこと、LT 評価表の学習目標の表現が曖昧であるという点があげられる。

### 3. LT 評価表

LT 評価表とは、組織によって規定されているLT の到達目標の一覧である。LT 到達目標を提供することで、LT の内容を事前に知らせ、不安解消の一助とする。

現在のLT 評価表は、少なくとも3種類の曖昧さを含むと自己分析した。1つ目は、LT の前提条件となるような項目を内包していることがあげられる（本来のLT の学習目標と前提条件が区別されていない）。例えば、LT 評価表の項目「技術」に含まれる「行動目標」は、「ドレーンの管理ができる。」とあり、4つの達成基準を含んでいる。そのうち2つは通常業務で既にできていることが含まれている。2つ目は、目標が行動で記述されていないことである。例えば、LT 評価表の項目「技術」に含まれる「行動目標」は、「医師や多職種、他スタッフと情報共有ができる」とあるが、何の情報共有するのかについては触れられていない。3つ目は、実施されるLT で到達できないゴールが記述されていることである。例えば、評価表の項目「態度」に含まれる「行動目標」は、「メンバーの知識・技術を高めることができる」は、新人のリーダーにとっては到達が難しい内容である。

このようにLT の学習目標が曖昧であり、LT 対象者には、できそうかどうかの判断がつかない表現になっていた。そこで、LT 評価表の見直しを行い、LT 評価表の表現をもとに、LT の学習目標を明確化する作業を行っていく。試しに「学習目標を明確化」して、作業を行った。例えば、「他職種とコミュニケーションを図り、それぞれの専門職の視点からの意見を聞くことができる」などである。現在は、一部分であるがこの取り組みを進め、すべての項目において学習目標の明確化を行う。

### 4. LT 事前チェックリストの開発

LT を受講するために必要な能力が十分か不十分かを判定するチェックリストである。LT を受講するために必要なことを伝え、不安の解消およびLT の準備をすることでLT を無事に実施できようという動機付けに用いる。

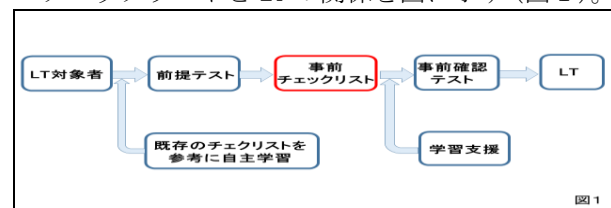
LT 事前チェックリストは、LT による到達目標の下位目標を検討し、LT の事前に到達しておくべき目標をリスト化して開発する。組織によって規定されているLT の到達目標の下位目標による構造を記述し、SME（教育担当・管理者）による妥当性の確認を行う。到達目標を構成する下位目標のうち、LT の事前に到達しておくべき目標をチェックリストとして一覧にする。LT の事前に到達しておくべき目標は、日頃の業務や知識、協働するリーダーの行動や立ち振る舞いの観察をもとに到達できる目標とする。LT の学習目標とLT 前までの看護業務とのギャップの代表例として、マネジメント業務があげられる。先の学習目標を明確化したものから、日頃の業務や知識、協働するリーダーの行動や立ち振る舞いの観察をもとに到達できる目標として、次のようなチェックリストの項目を作成した。

例1：緊急入院の依頼があった際、チームメンバーの役割分担ができる

これは一部で、学習目標の明確化とともにすべての項目でチェックリスト項目を検討し、SME による妥当性の確認を行う。

### 5. 今後の予定

チェックリストとLT の関係を図に示す（図1）。



記憶の必要な課題については前提テストで確認する。そして、LT 事前チェックリストで確認する項目は、知的技能に分類される課題となる。LT 対象者は、LT 事前チェックリストの項目を満たしているか「事前確認テスト」で確認できる構成を計画しており、LT 事前チェックリストを満たすことができないLT 対象者のために、知的技能の課題に対する学習支援が必要と考えている。

知的技能の学習支援モデルとして、認知的徒弟制度モデルが活用できると考えている。日頃のリーダーの振る舞いを見て、学ぶ「モデリング」として、リーダーの経験談を収集し、LT 事前チェックリストの項目ごとにそれらの経験談の概念を理解するための仕掛けを検討中である。

### 参考文献

内田吉宣、坂上慶子、酒井俊永、鴈丸明仁(2010) マネジメントにおける実践的知恵養成のためのケースメソッド. プロジェクトマネジメント学会 2010 年度春季研究発表大会: 197-202